おてら　第１０１号　令和４年　春彼岸号　発行　浄土真宗本願寺派 蒲原 浄光寺（TEL 025-229-0629）

おてら

常例十六日講
毎月十六日午後一時より
お経練習・法話会

写経会
毎月第二・四金曜日
午後一時より

春彼岸法要会

三月十八日～二十四日

三月二十一日（月・祝）
午前十一時より
彼岸中日法要
護持会総会

おときは中止致します

先祖への供養は
私への供養

ご本尊様にお参りしてから
お墓参りをしましょう

諸法無我 2

住職　蒲原霊英

以前、最先端の量子力学と仏教の「諸法無我」の教えの共通性について書きましたが、今回は近年の生物学からアプローチしてみたいと思います。

コロナ禍で人間の持つ免疫力の大切さが改めて認識され、特に消化管に共生している腸内細菌が、消化活動を補佐しているだけでなく、免疫活動の一部を担うなど様々な働きをしていると注目されています。そもそも、腸内細菌のみならず細菌や真菌類などの微生物は、腸の内部だけでなく私達の体内や体表のあらゆる所に棲みつき、宿主たる私達の活動に多面的に関わっています。諸説有りますが、約三十七兆個と考えられる人間の細胞の数の、およそ二～三倍もの数が居るそうです。そうなると、一人の人間は、独立した生命個体というより、様々な共生体と生きる複合体と捉える方が妥当なように思えます。このように、様々な生命体が複雑に絡み合って成立しているものの、あたかも一つの生物のように振る舞う生命体を、近年の生物学では「ホロビオント」という言葉で表すそうです。

当たり前のように、私は私の意思で私の体を動かし、私の命を生きていると思っています。しかし、この私も「ホロビオント」であり、私の体は私だけの体ではなく、私の命も私だけの命ではありません。また、腸内細菌が人間の行動や感情、意思決定にまで影響を及ぼしているという知見から、「腸は第二の脳である」という主張も知られるようになって来ています。すると、私はすべて私の意思で生きているとも言えません。まさに、これは「すべてのもの（物・者）において、『私』とか『私のもの』という実体（我）は存在しない。すべてのものは、その関係性において存在する（縁起）」という、仏教の「諸法無我」の教えそのものです。分かりやすい言葉で表すと、「おかげさま」の教えです。そもそも私の存在そのものが、様々な微生物のおかげで生かされているに過ぎません。そして、私が存在している社会に目を向けても、目に見えるだけでなく、目に見えない多くのものの力や恵みのおかげで、私は生かさせていただいているに過ぎないのです。だからこそ、私の命を支えて下さっているすべてのものに感謝しながら、この命を輝かせるよう精一杯生かさせていただきましょう。

合掌

参拝制限 行事中止 御正忌報恩講

浄土真宗のみ教えを開かれた宗祖親鸞聖人のご遺徳を偲び、お念仏に遇わせていただいたご恩に報謝する御正忌報恩講が、一月九日からご聖人の御祥月御命日の十六日まで本願寺の御影堂で営まれました。

ご門主はご親教（法話）で、新型コロナウイルス感染症の感染拡大に伴い参拝等を制限し諸行事を取り止めたことに触れ、「先の見通しが立たない状況が続く中で私達は不安や悩み、苦しみを抱えている」と述べられました。さらに、ご聖人が阿弥陀如来と出会い、その教えを広められたことを振り返り、「どのような状況にあっても、これからも阿弥陀様のはたらきを聞き、お念仏の中に日々を過ごして参りましょう」と呼び掛けられました。また、コロナ禍でも自宅でみ教えに触れる機会として、宗派や本山、築地本願寺で取り組んでいるインターネットを活用した法話や法要等が紹介されました。制限下でも期間中約二千人が参拝しました。

西本願寺の七不思議 その五 抜け雀の間

以前ご紹介した本願寺の対面所（鴻の間）の西にある控えの間の一つ「雀の間」の襖には、円山応瑞の名作「雀と竹の図」が描かれています。円山応瑞は江戸時代後期の絵師で、円山応挙の長男であり円山派の二代目として活躍していた人物です。この障壁画には八十八羽描かれたとされているのにもかかわらず、実際は八十六羽しか存在していません。あまりに生き生きと描かれているため、二羽は「庭に逃げた」と言われ、いつしか「抜け雀の間」と呼ばれて親しまれています。

また、格天井には三十六種類の四季折々の花が、花菱文様に囲まれた円相の中に見事に描かれています。一枚あたり十日、三十六枚で一年間の暦として楽しむことができるように描かれているそうです。何とも斬新な発想です。